# 行動を共にして

## 新たなたたかいへの決意

永江 美由紀

昭和三十八年十一月九日の三川鉱炭じん爆発によって、夫たち四百五十八人もの労働者が虐殺され、八百三十九人のCO中毒患者がつくり出されました。

三池の私たちは、この日なきためにこそ一九六〇年の安保・三池闘争を〝去るも地獄、残るも地獄〟の合言葉で、三百十三日を命がけでたたかったのでしたが結果的には勝利することはできませんでした。

活動家が首切られたあとの職場は、残った者にとっては地獄でした。既得権はハク奪され、労働条件、賃金での差別と、保安無視の労働強化で災害は続発し、四十八人も殺されたあげく、三年目にあの大災害です。まさに〝起こるべくして起きた〟人災だったのです。

救援の手も受けられずに、逃げ場のない真っ暗い地底でガスに狂い、血を吐きながら、一人またひとりと息絶えていった夫たちがあわれでなりません。

私は、悲しさと悔しさに泣き、それでも涙を怒りにかえて立ち上がりました。せめて四百五十八人を保安の人柱にたててほしい、今後炭鉱で災害が起きぬようにと、悲願をたてたたかいに取り組みました。

けれども、教訓として生かされず、その後も三池で、北海道で、九州で災害は繰り返され、尊い命が奪われています。本当に無念の一語に尽きます。

この三井の不条理を追及するために起こした民事訴訟で、公判が五十九回を数えた一月二十二日、谷水裁判長から出された和解意思の打診について、私たちは民主的に十分討議したのですが、原告団内部の意見の一致をみることができず、分裂原告団ができて大変な苦労をしました。

被告会社側は、十月三十一日よりやく和解交渉の席につくことになりました。この上は、法的にも社会的、道義的にも重大な責任が三井にあるのですから、私たち遺族や患者と家族に対する謝罪と十分な補償をすべきです。

私たちは、そのためにさらに団結したたかいを強めます。大災害から二十二年、裁判提訴以来十二年余りを三池労組とともにたたかい抜いてきたことは誇りです。これまでの全国の仲間の皆さんの大きなご支援に感謝します。

また、私たちを物心両面から支えていただいた三池の労働者に報いるために、今後も三池遺族会として、また原告団としてさらに行動をともにすることを決意しています。

第八次石炭政策の答申をひかえて、外国炭にゆだねようとする動きの中で、何としても民族資源の石炭を守り抜かねばなりません。石炭産業を守り抜くたたかいの中で、遂に命までも奪い取られた労働者の妻として、命のかぎりたたかい続けることをお誓いします。

× ×

永江さんは遺族会と原告団の事務局長です。新年特集号に寄せられていましたが紙面の都合で今号となりました。ご了承下さい。なお、四面に紹介のように今回『三池の母の詩』を出版されました。

# 五十五日目の散髪

高槻市 緒方 進

年金生活に入って九年目を迎え、経済的には今一つでも、気楽な暮らしをしている。例えばメーデーでも高槻市会場か、大阪市大会場にするかは、一人参加の私はその年の情勢しだいで決める。活気に満ち、創意工夫を凝らした飾り付け、ポスターやプラカードを作った頃を思い起こしながら見てまわる。そんな意味での気楽さである。

戦時中、物資不足で入手できなかった年を除いて、約五十年間日記を書き続けている。最近は、真新しい日記帳の予定表に、四月の花見。毎年の大阪高速印刷三池会の一泊旅行。一年毎の三池の馬渡会。十一月の年賀状作成などを予算とともにまず記入する。いずれも三池関係の根幹となり、他の会合よりも優先する。

二年前、近くに住む姪の結婚式と第二回馬渡会とが重なった。妹や柳川から来阪の次妹たちにも理解してもらい馬渡会に参加した。

花見は、毎年三十人から四十人の子供たちを含めての楽しい賑やかな会合で、強風や雨の日でも予定どおり実施できるのは、場所、用具、台所まで提供してもらう気さくな中村隼太氏ご夫妻の貢献が大きい。準備から後片付けまで、理解と協力、心と心のふれ合いで十四年間も続いたと思っている。

「飽食の世代」「中流意識の時代」そして〝金さえ払えば〟の風潮に流されず、六〇年安保と三池闘争から二十五年を経ても、信頼と友情の交流が続き、お互いの消息を確かめ合い、激励の場となっている。

「外ズラのとうちゃん」と言われるほど、衝動買いや無駄使いの多い私は、六月と八月の二回散髪を我慢してみた。戦時下の二十五日毎の坊主頭時代に比べ、長髪も気にしない平和な時代……。散髪代は少額でも、夏季、年末手当のない生活。そして毎月の定期支出が、住宅ローン七万円、国民健保料一万九千円、高速会積立金五千円、このほか冠婚葬祭や雑多な支出で家内に迷惑をかけているので、五十五日と四十六日の二回散髪代を節約したのである。

それだけに、二十六人の参加で第三回馬渡会が伊勢・志摩の一泊旅行として盛大に楽しく実施できたのは一層うれしいことだった。

今年の暮れも友人たちとの雑談を交えての賀状作り。私の千四百枚も無事完成した。やがて迎える元旦を楽しみにしながら……。

× ×

緒方さんは大阪府高槻市深沢町一丁目二十四の二にお住まいです。新年号の随想として寄せられていましたが、紙面の都合で今号となりました。ご了承下さい。

# 三池炭鉱の暮らし

## 第一回

## ナウイはなし

武松 輝男

これからしばらくの間、社宅のことについて記してみたい。

いまは、毎月いくばくかの金を積み立て、それがある額に達すると融資などを加えて「自分の家」を新築する。いわゆる持ち家制度が定着していて、新築したばかりの垢抜けした大きな家に社宅を離れ移り住む人が多くなっている。

家の造りは日本風が主である。あまり広くない庭も植木や石をほどよく配置したこざっぱりした庭園をもっているところが多い。

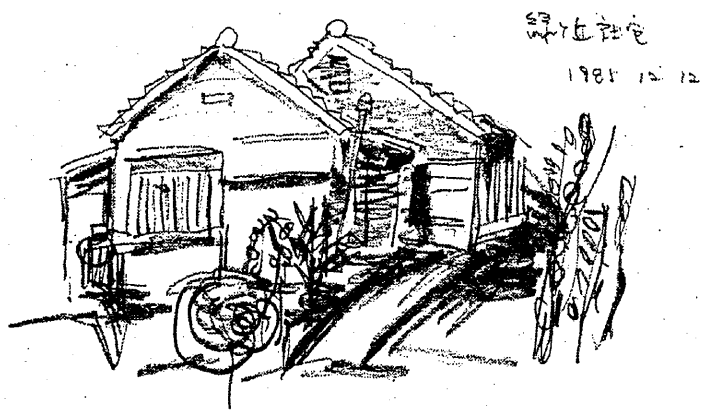
庭を眺めてみると、なかには常緑樹だけでまとめた庭もあるし、あるいは逆に、落葉樹だけの庭木を配したところもある。どちらがよいかはその家に住む人の好みによって異なってくる。木の葉が黄土色に彩づいて、やがて枝を離れて風に身をまかせる、その風情をめでる人は性格がどうの、といったことまで住まいとともに語られることは楽しいことである。

住まいとは、人が主人公になることで、だから「ニンベン」に「アルジ」と書くのだと思っている。が、その住まいが、小屋から納屋や長屋と呼ばれ、そのあと社宅と言われるようになった炭鉱社宅の移り変わりの背景に、人びとのなかに巣くっている住まいへの憧憬というようなものを見い出すようにも思えるのである。

納屋から社宅に移り住んだ老坑夫は、そのへんの心境をつぎのように語ってくれる。

「いくつのときだったでしょうかねえ。小学校にあがる前じゃったことはたしかですが、棟と棟との間に割り溝があって、年中じめじめしていてですネ、ナメクジと一緒に住んでいるようなものでした。ハイ。そん納屋から社宅を見るとご殿のごと見えたもんです。

誰が住まっしゃるとじゃろか、とうらやましい声を出したら「申し込んどる」と野太い声で答えた親父は、そりゃぁ神サンのごと見えたもんです。納屋は亀甲じゃったです。それからしばらくして、その新築社宅に移り住むことができたときは天に昇ったごと感じたもんです。この社宅のことでいまでも忘れることができんことは、内便所じゃったこと。冬は寒くなかし、雨の日も濡れんでよか。共同便所じゃったけんでそりゃぁうれしかったです。幽霊ン話バ聞いたとき暗か外便所に行くのが恐くてですね、余計な地図バ描いて、お袋から小言をいわれたもんです。内便所ならその心配がなか、うれしかったです。それから楽しかったことは、内便所に豆電球がついていてスイッチをカチッと入れるとパッと灯く。それが面白くてですね、一日中、そのスイッチで遊んどったことです」




当時の社宅の電灯は定刻灯とでも言えるもので、夕方少し暗くなりかかったころ自然に点灯し、翌朝明るくなると電灯は消えた。このまえ女学生にこのことを話したら、「便利ねえ」と言う。晴天のときだけならよいが、雨の日などは室の中はうす暗かったものだ。

スイッチとか、ボタンひとつで生活できる今ですから、そのスイッチやボタンを押さないで生活できることを望んでいるようで、「便利ねえ」にはとまどってしまった。

定刻灯がいま様にいうナウイものなら、生活などというものすらできないだろう。夕刻にならないと冷房も暖房もきかないようじゃかえって不満がつもると思うのだが。

いまは従量灯にかわっていて、女学生の感嘆符をうける生活になっていないが。それでもいまのほうがよいにきまっている。

三池闘争25周年記念出版

『三池闘争』の記録

全国の労働者の支援をうけ、情熱を燃やしてたたかい、そしてわが国の労働運動史上に特筆される『三池闘争』から昨年で二十五年を迎えました。この機会に、多くの要望と歴史的な課題にこたえ、研究の素材を提供し、あわせて資料の保存、さらに今後の労働運動の発展にいささかでも寄与することを願って、当時の機関紙『みいけ』と『日刊情報』を中心にして〝『三池闘争』の記録〟として刊行いたしました。

〜内 容〜

▲刊行のことば ▲目次
▲機関紙『みいけ』(縮刷)〔一九五九・八・二(五八五号)〜一九六〇・一二・一八(六五三号)〕
▲『日刊情報』(縮刷)〔一九六〇・一・三〇(一号)〜一九六〇・一二・八(二八〇号)付・号外〕
▲『あれから一年』(『みいけ』連載から)
▲写真集「たたかいの中から」
▲年表 ▲たたかいの歌 ▲編集後記

※体 裁 A4版(電話帳の大きさ)厚さ三センチ
重さ一・五kg 六七〇頁
本文上質紙使用 表紙ビニールコート
※頒 価 五、〇〇〇円(送料四〇〇円)

※二、〇〇〇部限定発行につき、お早目にお求め下さい。
〒八三六 大牟田市入船町一 三池炭鉱労働組合
(電話〇九四四-五三-三〇三三)へどうぞ。
※三池労組元組合員には割り引きの取り扱いがありますのでお問い合わせ下さい。
※ご送金は、労働金庫大牟田支店振替口座
(九六八九四六-〇三六)への振り込み、または現金封筒、郵便小為替でお願いします。